人文学部准教授
石阪督規

いしざかとくのり
修士（学術）
専門分野は、地域社会学

この記事に関連した情報は以下のアドレスでもご覧になれます。
http://www.mie-u.ac.jp/links/research/

右図／津の観光PRヒーロー「ツヨインジャー」。「津、良い」と「強い」とをかけたネーミング。（図2）

官と民、若者と高齢者が結びつく持続的なまちづくりを目指して。

少子高齢化の時代、縮小しつつあるコミュニティを再生しようと
日本各地で、官民協働のまちづくりの動きが活発化しています。
三重大学は、津市の試みである「津市げんき大学」に学生たちが参画。
人文学部では、官民学協働の持続的なまちづくりを目指し、
学生と地域住民、行政とを結びつける取り組みにも挑戦しています。

元気な街の誕生

少子高齢化。最近、あちこちで目にする言葉です。日本の多くの地域では、この少子高齢化の進行に伴う人口減少が進みつつあると言われています。人口減少は、コミュニティの崩壊、生活基盤の脆弱化につながるとの懸念もありますが、反面、縮小しつつあるコミュニティや地域生活のあり方をあらためて考え直し、それらを現状に即した形に再編、再生させていく意欲的な取り組みも数多く紹介されています。かつてのように、大規模な事業で地域を潤すことは難しくなりましたが、ユニークな発想・アイデアをもった若者たちが、行政や市民団体、企業などと連携して、地域社会に新しい風を吹かせる、そんな元気な街が、今、数多く生まれつつあります。

津市を変えた「津市げんき大学」

私が本学に赴任し、津市の住民となった10年前、学生たちに「津といえば、何？」と問いかけると、「一文字の市」もしくは「三重の県庁所在地」と答える学生が大半を占めていました。それが最近では、「うなぎ」「津ぎょうざ」（図1）などのグルメ、さらには「ツヨインジャー」（図2）「シロモチくん」（図3）といったキャラクターまで出てくるようになりました。今思えば、これまでの津市のイメージを一変させたのが、「津市げんき大学」の誕生だったように思います。さまざまなプロジェクトや企画を官民協働で推進し、グルメの開発や普及、キャラクターやメディアを活用したパフォーマンスなどで、10市町村による合併直後の新しい津市を大いに盛り上げてきました。本学にも、三重大学分校が開校し、既に多くの学生がげんき大学の取り組みに参画しています（図4）。

津市内の飲食店で続々とメニュー化されている。取扱店には目印ののぼりが掲げられている。（図1）

藤堂高虎公入府400年記念事業マスコットキャラクター「シロモチくん」（図3）

津市美杉町を訪れ、地元の方々と懇談する「津市げんき大学三重大学分校」の学生たち。（図4）

尾鷲市早田町でのコミュニティ再生事業。学生たちが魚の仕分け作業を行った。（図5）

官民協働のまちづくり

この「津市げんき大学」は、まちづくりの一つの例ですが、近年、こうした官民協働のまちづくりがあちこちで進められています。自治基本条例やまちづくり推進条例などを制定する自治体が増え、行政と市民とが協働して事業を行う体制が整えられたことや「新しい時代の公」「新しい公共」などの言葉に象徴されるように、公共的な部門において行政が市民の能力や経験を積極的に活用しようとし始めたことも、官民協働のまちづくりを推進する大きなきっかけとなったように思います。例えば、津市のようにご当地グルメやローカルヒーローが注目を集めている地域も、官民が協働してそれらを推進しているケースが多いと言えましょう。しかし、昨今の協働ブームですが、ただのブームで終わらせない工夫も必要です。官民協働というと聞こえはいいですが、反面、それを実践するのは大変難しくもあります。

「ヨコの連携」と「タテの連携」

「津市げんき大学」をはじめ、官民協働が持続的なまちづくりへと結びついているケースには、ある共通性があります。一つは、対等の原則。もう一つは、世代間連携です。官民が同じテーブルで対等に話し合えるような場を確保できるかどうか。そして、まちづくりを推進する組織の中に、特に大学生やフリーターなどの若い年齢層を取り込めるかどうか。つまり、官民という「ヨコの連携」と、世代という「タテの連携」とをうまく整合させられるかが、持続的なまちづくりの鍵であると言えます。現在、私の研究室では、三重県の尾鷲市、多気町、紀宝町の高齢化や人口減少の進む地域で、官民学協働のまちづくり、コミュニティ再生事業を進めています（図5）。また、本学のキャリア支援科目「まちづくり実践」を通じて、学生と地域住民、行政とを結びつける取り組みも進めています。ここでも、県や市町の見識と住民や学生たちのバイタリティとをどのように整合していくかが課題となっています。

縮小化社会の到来に備えて

少子高齢化は、確かに難しい課題を数多く含むものです。しかし、それをネガティブなものととらえるのではなく、むしろ、少子と高齢とを連携させた新たなまちづくりへとつなげていく可能性をもったものと位置づけてみるのもよいかもしれません。これからの地域コミュニティは、人口においても、規模においても確実に縮小していくことになります。こうした縮小化社会のもとでは、例えば、これまで10人でしていたことを3人でしなければならなくなるわけです。役割や仕事を共有していくためにも、官民の、そして世代を超えた新たな協働、連携は不可欠です。まちづくりは、我々自らが、こうした社会の到来に備えて意識改革を図ることでもあり、また官民学協働の意義や手法を皆で考えることでもあると言えるのではないでしょうか。「まちづくりは、ひとづくり」と言われますが、将来のまちづくりの担い手を育成・輩出する大学の役割も、今後ますます大きくなっていくことでしょう。